

プラハの国立博物館

須藤 茂¹⁾

1. はじめに

先日、トム・クルーズ主演のミッション・インポッシブル(1996年制作)という映画をテレビで見ました。スパイ映画です。詳しい内容を知りたい方は、別な映画雑誌等を御覧下さい。筆者がこの映画を見たのは、観光で訪れたことのあるプラハのカレル橋(第1図)界隈で撮影が行われたという旅行ガイドブックの記事を読んだからです。

カレル橋のシーンは、暗く、見ずらくて良くわかりませんでした。それよりも、あっと驚く場面がありました。何だこれは、と目を疑いました。アメリカ大使館でのパーティーの場面です。映し出されたのは何と国立博物館でした。画面には、階段の踊り場だけしか登場しませんでした。何せこの階段を上っていくと、そこには華やかなパーティー会場ではなく、岩石や鉱物の展示室があるのでから。

このただ者ではない博物館を以下に紹介します。ただし筆者は観光客として極短時間滞在しただけです。詳しい地質学的な背景は別にして、どんなところかだけをお知らせします。

本誌のバックナンバーをたどると、チェコスロバキア時代の情報が323号(資料情報係, 1981)に、チェコ共和国の鉱床(円城寺, 1998)を含めた「東欧諸国の地質と鉱床特集号」が530号にそれぞれ載っています。

2. 立地条件

博物館は人に見せるための展示をしているところですから、多くの人を訪ねて来易い場所にある必要があります。我がつくばの地質標本館はその点で不利です。プラハの国立博物館(Narodoni muzeum, Praha)は、チェコ共和国の首都の中心



第1図 カレル橋, 14世紀に造られた石橋。ヴルタヴァ(ドイツ語でモルダウ)川が南(左)から北に流れています。遠景の、フラツチャニの丘に聳える聖ピート大聖堂を含む一角がプラハ城で、現在大統領府や美術館などがあります。

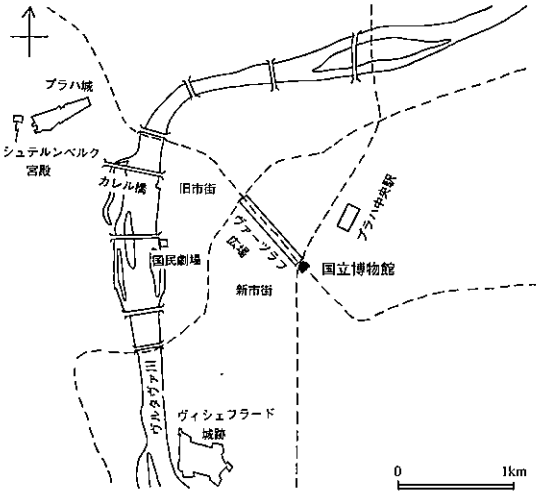
地にあります(第2図)。ところで、プラハのNarodni divadloは、国民劇場と訳されていることが多いのですが、この2つの建物はそれぞれ、国民博物館、国立劇場と訳されている場合もあります。翻訳の問題だけでもないようですので、その歴史については後で記します。

プラハの中心にヴァーツラフ広場(Vaclavske namesti)という大通公園があります。この広場の南東端真正面に国立博物館があります(第3図)。近くには中央駅もありますが、博物館の玄関前には地下鉄の駅があり、プラハに3路線ある地下鉄のうちの2路線が丁度ここで交差しています。駅名は、ずばりMuzeumです。立地条件として、これ以上の贅沢はありません。博物館の北東隣は近代的な建物です。元連邦議会で、両者の間の道路には装甲車が止められ、警備の兵士がいました。

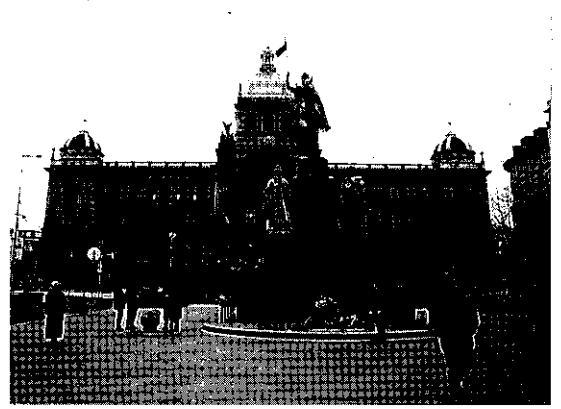
ところで、ヴァーツラフ広場と聞いて、あそこか

キーワード: チェコ, プラハ, 国立博物館, 自然史博物館, シュテルンベルク, ヴァーツラフ広場, クトナー・ホラ, テクタイト, モルダヴァイト

1) 産総研 地球科学情報研究部門



第2図 プラハ市街略図。破線は地下鉄路線。

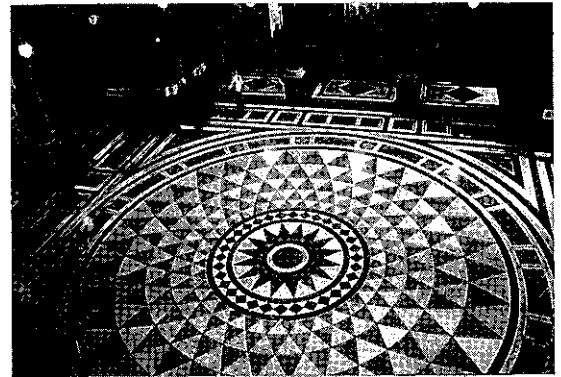


第3図 プラハ国立博物館(正面)。手前にあるのが聖ヴァーツラフ像。さらにその手前、撮影地点の後ろに焼身自殺学生の碑があり、ヴァーツラフ広場が広く続きます。

な、と思った方がいらっしやるかも知れません。1968年8月、プラハの春、人間の顔をした社会主義、に対して、旧ソ連を中心としたワルシャワ機構は軍隊を送り込み、この広場は戦車とそれに抗議する市民とで埋めつくされました。チェコスロバキアは、軍事的に抵抗する道を選ばず、春は終わりました。その過程で、1人の学生が、1969年1月に焼身自殺をもって抗議しました。場所は、この博物館前です。追悼碑が博物館前の、ヴァーツラフ像の前にあります。学生は3日後に死にましたが、最近になって、この青年が監禁状態にあった病室での映像がテレビで放映されました。自殺の場所は追悼碑のある場所ではなく、まさに博物館の玄関前であるという話も聞きました。当時の新聞によれば、焼身自殺者は相次いだようです。また、この広場は、1989年のビロード革命でも中心的な動きがあったところです。この博物館はチェコの近・現代史の中心地に建っているのです。

3. 建物

展示品ではなく、まず建物を営めるのは博物館に対して失礼かも知れませんが、この場所には、やはりそれなりの建物でないと、似合わないのでしょうか。正面から見ると、いかにもどっしりとした感じがします。古そうに見えますが、実は比較的新しい建築物です。1885-90年に建てられた、新ルネサンス様式なのだそうです。それ以前に撮影された写真を見ますと、この場所には大きな建物はなく、その

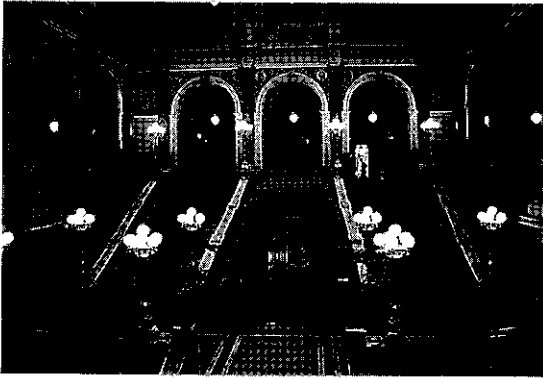


第4図 国立博物館中央ホールの床。岩石のモザイクからなり、周囲には多くの像が並んでいます。

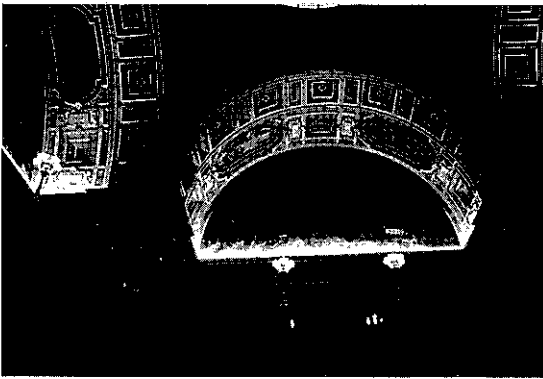
先まで見通せる状態でした。ここは新市街と言われているところです。対する西隣の旧市街は、数百年以上経った建築物がひしめいていて、世界遺産に指定されています。

博物館中央のホールの床は岩石のモザイクでできています(第4図)。最初に書きました階段の踊り場(第5図)には、なぜかピアノが置いてありました。訪れたときには、自然系の博物館になぜだろうと、わけがわかりませんでした。後で調べたところ、ここではよくコンサートが開かれるのだそうです。聴衆は階段に腰を掛けます。多目的利用です。映画のロケもその一環なのでしょう。多角的経営と言うべきかも知れませんが、装飾は天井まで施されています(第6図)。

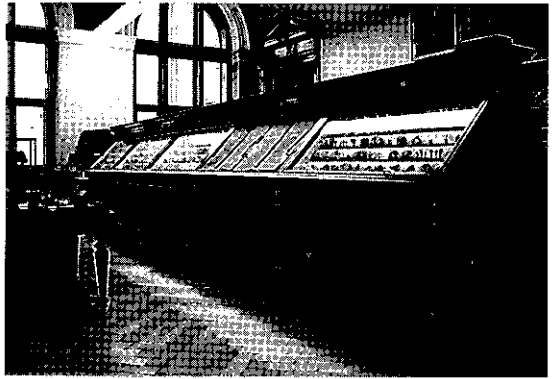
展示スペースは2つのフロアからなり、中央の回



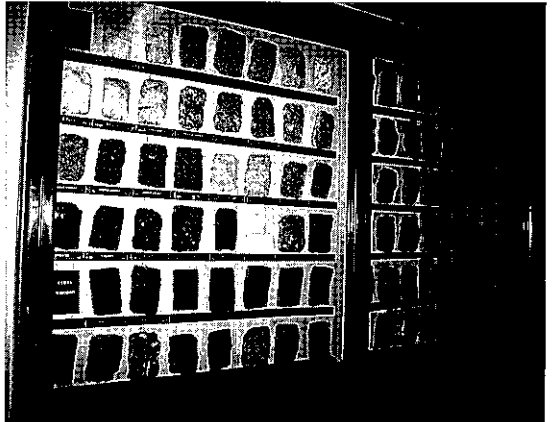
第5図 国立博物館中央階段。左下に見えるのが踊り場のピアノです。スパイ大作戦? が繰り広げられた撮影場所です。



第6図 国立博物館天井。上から下まで装飾が施されています。



第7図 鉱物標本展示例。いかにも歴史がありそうなケースです。光を嫌う標本には覆いがかけられており、開いて覗くようになっています。



第8図 岩石標本展示例。作成者の律儀な性格が読み取れます。

廊を取り囲むようにいくつかの部屋に分かれています。博物館の常ですが、全部の展示物を短時間でつぶさに見ることはできません。下のフロアには人類史と地学関係、上階には生物関係が展示されています。

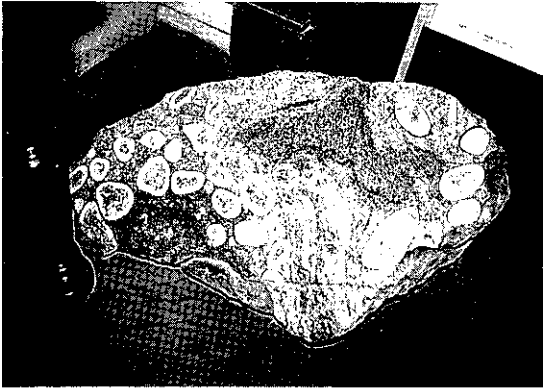
入場料金は70コルナ(1コルナは約3.4円)、写真撮影を行うなら、さらに50コルナ必要で、許可証のワッペンが渡されます。ヘッドホーンによるガイド(有料)もありますが、筆者は遠慮しました。これまでの経験によると、これは真面目な見学者向けで、あまりにも短時間の駆け足見学者には向かないと判断したからです。いざ入場しようとしたら、ザックとコート類はクロークへと言われ、また料金が、と思ったら、ここは無料でした。それがわかると、にこにこして、係の人にジェクイヴァーム(ありがとう)とあいさつをします。

4. 展示物

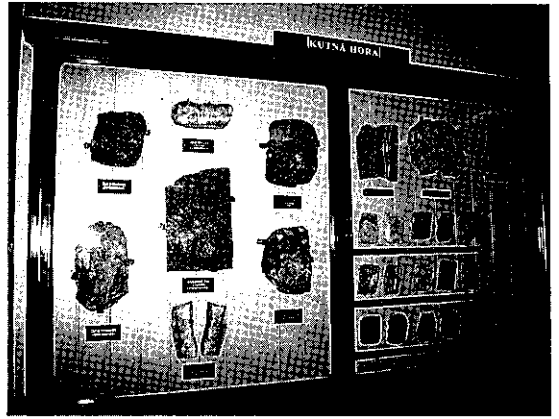
普通、地学研究者ならば、ここで詳しく記載するところですが、筆者は展示物を斜めに見てきただけです。著しく省略します。

岩石・鉱物とも展示標本数は多いです。小さな標本は水平及び垂直のケースの中に、大きな標本はケースの間や床に展示されています(第7,8,9図)。説明はチェコ語なので、岩石・鉱物の名前の一部はある程度推測できますが、それ以外はほとんど理解できませんでした。

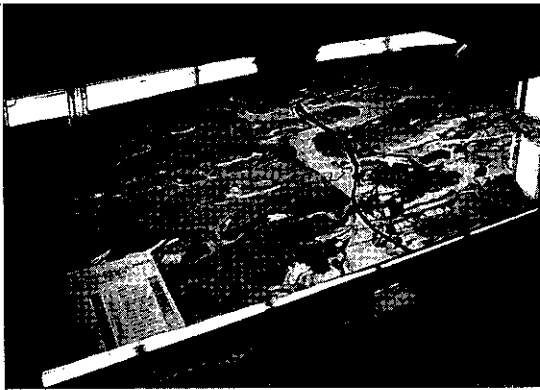
展示物の多くはかなり長期間動かされていないものと思われます。そういう点ではマニアや専門家向けかも知れません。ほかの博物館でも同様でしょうが、個々の標本の説明の文字は小さく、ざっと見ようとする者には辛いものがあります。



第9図 大きな岩石標本の例。Cerna v Posumavi 付近の Muckov産の球状花崗岩で、さしわたし90cmあります。



第11図 クトナー・ホラ鉱山の標本。かつての繁栄をもたらした銀山の試料が展示されています。



第10図 プラハ市街の地質立体模型。プラハは標高200-400mの丘陵地帯にあり、模型としての迫力には欠けます。

ロビーや階段周りには、胸像がかなりの数立ち並んでいます。いちいち確かめることもしませんが、必ずしも科学に関係する先駆者の像だけでは限らないようです。日本の自然系博物館ではあまり見られない光景だと思いました。

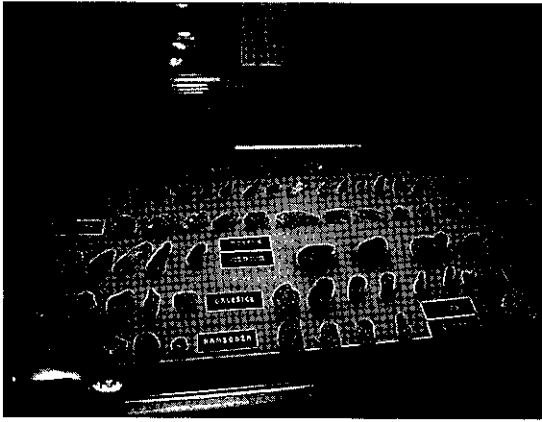
地質図などを使った一般的な地質の説明はあまりありません。プラハの中心部については、オーバレイのついた立体地質模型がありました(第10図)。例えば子供にどの程度理解されるのかは良くわかりませんでした。

地域別の展示として、クトナー・ホラ(Kutna Hora)の鉱産物がありました(第11図)。ここは、13世紀にまず炭坑が開発され、後に銀山が発見されて14世紀にはヨーロッパの銀貨の一大供給地になったところでした。当時の神聖ローマ帝国皇帝カレル4世

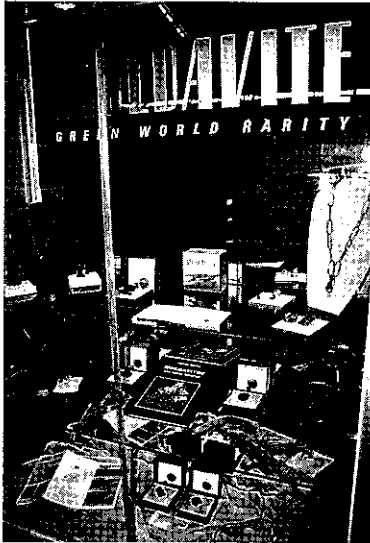
はプラハを居住地にしてい、プラハ城再建、カレル橋建設、大学創設などが行われ、プラハは黄金時代を迎えました。しかしながら16世紀には銀は枯渇しはじめ、アメリカ大陸から大量の銀が輸入されるようになったこともあり、18世紀にはクトナー・ホラの銀山は閉山しました。この間には、宗教を巡る大戦争があり、大激変の時代でした。現在、クトナー・ホラの街には美しい教会などが残っているために、世界遺産に指定され、プラハの東方約60kmの近距離に位置しているためもあり、観光地になっています。ところで、この鉱山開発にはドイツからの鉱山技師が当たりました。このような関係、ドイツ人が上の階級を占めることは、ほかの分野でもあり、後々の侵略や戦争という悲劇的な結果をもたらす要因となります。

貴石・宝石の小さな展示室は、明るく、人気があるようでしたが、ここは許可証を持っていても写真撮影は禁止でした。試料はチェコ産のものとは限りません。

少し大きな部屋には隕石関係の展示がありました。特にテクタイトが目立ちました(第12図)。テクタイトは、隕石が衝突したときに飛散し溶融した岩石が急冷してガラスになったもので、昔は地球外のものもあるのではないかとされていたものです。円盤型や紡錘形などの独特の形をしています。東南アジアと並んで有名な産地の1つがこのチェコです。モルダウ川(Moldau=ドイツ語、下流ではエルベ川と名が変わります)、チェコ名ではヴルタヴァ川(Vltava)流域に産することから、モルダヴァイト

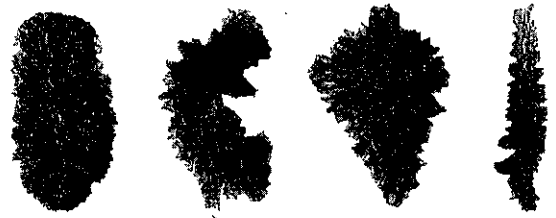


第12図 隕石関係展示室のテクタイト標本。カンボジアなど世界各地の標本ですが、それらは、ほとんど黒色です。



第13図 プラハ空港ロビーのテクタイトの宣伝展示、裸石や研磨されたモルダヴァイト標本、効能書きなどが展示されています。

(moldavite = 英語, moldavit = ドイツ語, vltavin = チェコ語)と名付けられています。ほかの多くの産地のテクタイトが黒色であるのに対し、モルダヴァイトは美しい緑色をしている特徴があります。プラハ空港の手続きカウンターのあるロビーには、このモルダヴァイトの宣伝の展示がありました(第13図)。そこに置いてあった宣伝パンフレットには、英語版、ドイツ・チェコ・ロシア3ヵ国語版、のほかに何と日本語版もあったのです。そもそもモルダヴァイトとかテクタイトとか言う言葉を聞いたことのある日本人



第14図 独特の形をしたフルム(左)とベセドニツェ(右)産のモルダヴァイト。FONSUS社の宣伝パンフレットより。

がどれだけいるのでしょうか。でも、そのパンフレットを見て少し納得しました。曰く、この石は疲労回復、頭痛緩和効力のあるエネルギーを放っており、集中力の訓練、瞑想の伴侶に適しています、と。魅力的にきれいであればそれで良いのかも知れません。その広告によれば、FONSUSという会社が独占的に販売しているそうで、産地はプラハの南約140kmにあるフルム・ナド・マルシー(Chlum nad Malsi)やベセドニツェ(Besednice)で、最近世界遺産に指定されたことでにわか観光地として脚光を浴びるようになったチェスキー・クルムロフ(Chesky Krumlov)の近くです。ベセドニツェ産のものが最も品質が高いとされており、特に表面が細かく彫刻されたような特徴のある形のために珍重されています(第14図)。ベセドニツェでの産出範囲は80×500mの極狭い区域だそうです。もちろん国内のほかの地点からの産出の報告もあります。

もう1つ特徴的できれいな展示物はざくろ石(ガーネット)です。チェコ特産のものは明るい赤色をしており、パイロップのようです。博物館にはそれほど量は展示されていません。むしろ新鮮? きれいなものは、街の宝飾店・土産物屋の方でよく観察できます。粒の小さいものが集められて各種宝飾品に製品化されています。ボヘミアン・ガーネットと呼ばれ、プラハの北東約80kmにある、トゥルノフ(Turnov)が有名な加工産地です。宣伝広告によれば、そこでは製品の価格はプラハの半分、日本の6分の1ということですが、筆者は確かめていません。最近資源が枯渇しており、実は輸入した物を加工しているのだという話も聞かれます。ボヘミアン・ガラスと並んで、外貨獲得の役目を果たしている鉱産物製品なのでしょう。

5. 売店

博物館内には売店が2つあります。入り口にある方は、主に書籍などの資料類、奥にあるものは鉱物などの標本類を扱っています。どちらも一坪程の小さいものです。展示物の写真が多く掲載されているガイドブックを探しましたが、地学に関しては1冊見つけたただけでした(Narodni Museum, Praha, 2000)。買い求めましたがおつりが少ないのではと、いつまでも立ち止まっていると、店員さんが前のガラスをとんとんと叩きました。そこには、英語版は10コルナ高いですとの説明書きが、納得しました。本には4,000部印刷と書いてありました。英語版だけの数字でしょうか、ドイツ語版、チェコ語版合わせてでしょうか。かつて筆者らは、わが国の火山の絵葉書やポスターを作成したことがあります。印刷コストの点から、日本の小中学生にも、外国の火山研究者にも配付することを考えて和英並記にしました。チェコは小国です。3ヵ国語以上の版を作成するのが普通なのでしょうか。ちなみに、街の書店で買ったプラハ市の観光地図は8ヵ国語並記でした。

6. 見学者

訪問前に日本のガイドブックでこの博物館について調べてみました。ほとんどの本の論調は一致していました。曰く、岩石や鉱物が展示してある博物館です。物好きな人はどうぞ。

確かに筆者が訪問したときには、ほかの日本人見学者には会いませんでした。しかしながら日本人以外には、このような博物館のファンは多いようです。また、先生に連れられた子供達も訪ねていました。後で確かめましたが、外国出版社によるガイドブックの翻訳ものには、物好きだけが行けとは書いてありませんでした。

プラハの繁華街でも石(岩石・鉱物標本)を売っている店がありました。経済的に余裕がある国の中では、相対的に、日本は石が好きなの割合が際立って少ないようです。生物関係では、特に子供達には、大きな動物の骨に人気があるようでした。

7. 組織と発展史

ここまで国立博物館として紹介してきたのは、多

くの地図やガイドブックにそう書いてあるから従いましたが、実は自然史博物館というべき物で、広義の国立博物館の一部に相当します。国立博物館の組織の中にある他の部分は、歴史博物館、図書館博物館、チェコ音楽博物館、アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館です。プラハには、ほかに国立技術博物館を始め多くの博物館がありますが、それらは別組織のようです。

広義の国立博物館の建物は、プラハ市内に12ヵ所、市外に6ヵ所あり、所蔵品の合計は、1,300万点です。しかしながら、もちろんほかの博物館の多くがそうであるように、一般者の目に触れるように展示してあるのはそのうちの一部です。大部分は研究者のみに開放されており、国の内外から研究者が訪れているそうです。

1940年代には、鉱物学部の一部として化学研究実験所が作られました。これは、試料をいかに良い状態で保存するかという研究をするところです。また、1934年には、鳥に標識をつけて調べるセンターが創設されました。すべての標識にはプラハ自然史博物館の名前が書き記してあり、これまでに標識を付けた鳥の数は200種、360万羽に及びます。最近では毎年10万羽に標識を付けており、送信機を付けることもあります。チェコは動物地理学にも交差点の位置にあり、標識を付けた鳥はアイスランド、エニセイ河流域から、アフリカ南端までの広い範囲にわたって飛び回り生息していることがわかりました。

自然史博物館は、1818年に愛国博物館(後に国立博物館)の主要な一部として設立され、1964年に国立博物館の一部として再スタートしました。国立(自然史)博物館は鉱物学・岩石学、古生物学、菌類学、植物学、昆虫学、動物学、人類学の7部からなります。所蔵品は、関わった研究者が自ら収集したもののほか、寄贈、交換、購入された物が加えられており、予算は、文化省、サイエンス・アカデミーや共和国からの補助金があてられています。ピロード革命以降は、外国の研究所、博物館や大学との交流も盛んになっています。博物館報告自然史編は1827年から発行されているチェコで最も古い科学誌であり、このほかに各部からも報告書が出版されています。

鉱物学・岩石学部の試料は、1818年の創設時に

は、フラツチャニ(Hradcany)地区のプラハ城の西隣にあるシュテルンベルク宮殿(Sternbersky palac)に所蔵されていました。試料は1892年から現在地に移し始められ、1895年にはほぼ現在と同じ状態で展示されています。現在、所蔵試料は20万点であり、そのうち5-7%が常設または臨時に展示されています。1991年、1995-96年には展示品を微調整しました。

鉱物に関していえば、所蔵品は創設時のシュテルンベルク(Kaspar M. Sternberg, 1761-1838)のコレクションが8,500点で、現在は約2,100種類、10万点あります。古い物は17世紀のドイツの大学の所蔵物で、木製のショーケースは1891-1909年に製造されたものです。黒光りしていますが、汚れてはいません。世界の鉱物の化学組成別の系統的展示が4,000点、チェコ国内の地域別の鉱床鉱物及び時代順の鉱業鉱物がそれぞれ1,500点展示してあります。

シュテルンベルクという名前が2回出てきました。ボヘミアの大貴族の名前です。シュテルンベルク宮殿は、現在国立美術館になっています。美術品を集めたフランツ・ヨーゼフ・シュテルンベルクらの業績の結果です。彼とは別に、鉱物を集めたカシュパル・シュテルンベルクがいました。富と興味を鉱物収集に注ぎ込んだものと思われます。彼はその後、ほかの博物学仲間とともに、博物館設立の主要なメンバーになったのです。

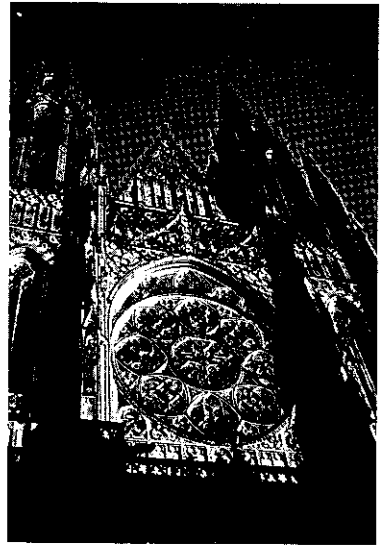
宝石関係は、博物館が現在地に建設されてから100周年であったのを記念して、1991年に、新たに部屋が作られ展示されるようになりました。

テクタイトは、1930年から展示され、現在、モルダヴァイト1,700点のほかに、世界各地の試料を合わせて23,200点が所蔵されています。

岩石は、25,000標本が所蔵され、地域別年代順に展示してあります。古生物関係の試料もたくさんありますが、筆者は真面目に見ていないので紹介は省略します。

8. 建造物

観光地として有名なカレル橋(Karlův most)や聖ビート大聖堂(katedrál sv. Víta, 第15図)を含め多くの古い建築物には砂岩が使われています。ドイツ南部からチェコにかけての建物には多く使用

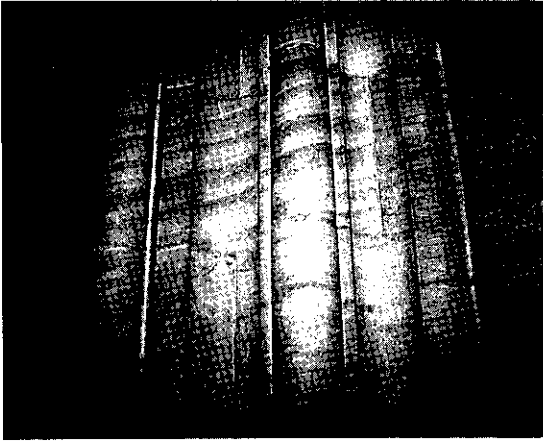


第15図 プラハ城内、聖ビート大聖堂の正面。砂岩は夕陽を浴びると黄金に輝きます。中央の大きな丸を始めステンドグラスも多用されていますが、それらは外からは、くすんで見えるだけです。

されています。外壁の表面は黒ずんでいます。いかにも年代物といった感じで、プラハ全体を落ち着いた風情にしているのは確かです。一部はもろくなり、崩れています。内部にはきれいなところもあります。プラハ城内にある聖ビート大聖堂は、正面から見て奥の方が1344年に建設が開始され、順に建て加えられ、手前の方が完成したのは1929年であったという複合建築物です。手前の新しい部分では内壁に使用されている砂岩の一部に見事な堆積時の模様、ラミナが見えます(第16図)。

チェコの地質調査所からは、人と石との関わりあいを記した大著が出版されています(Kukal et al., 1989)。それによれば、聖ビート大聖堂、カレル橋、国民劇場、国立博物館などで使用されている砂岩の多くは中生代の白亜紀のもので、一部には古生代のものもあるそうです。

固いことが必要な床などには、別な石材が使われています。はじめの方に紹介したヴァーツラフ像の台座は黒雲母閃緑岩、ヴィシェフラド(Vysehrad)城跡の中の有名人墓地にある国民的作曲家スメタナの墓石(第17図)やプラハ城の建物の大部分は花崗岩でできています。花崗岩類の石切り場はプラハ近郊にもあります。街中の建物にはもちろん大理石も多用されています。



第16図 聖ピート大聖堂の内壁に使用されている、ラミナのある砂岩。



第17図 ヴィシェフラドの墓地にあるスメタナの墓。

9. 歴史と文化の背景

地図を見ればわかるように、チェコはヨーロッパの中心に位置しています。国土の面積が約8万平方km、人口が約1千万人の大きくない国です。したがってより大きな国からは、たびたび軍事的あるいは宗教上の侵略や干渉を受け続けてきました。あるときは幸運にもヨーロッパの文化の中心地になったこともありましたが、またあるときは徹底的に痛めつけられもしました。ナチス・ドイツによる侵略やプラハの春の終焉時には、大きな武力抵抗をしませんでした。それまでの歴史の教訓がチェコ国民にそうさせたのかも知れません。

国立または国民博物館の基礎ができた1818年、及び現在地に移設された1891年には、実はチェコという国はなかったのです。チェコスロバキアが独立したのは1918年のことです。当時、チェコという国がなくとも、みんなの心の拠り所として博物館を造ろうとする意気込みがそこにあったのではないのでしょうか。国民劇場は、当時チェコ語を使用した上演が禁止されていた官製の劇場に対抗して、市民が基金を集めて建設を始め、1881年の一般公開前日に火災で消失するという悲劇があってもなお再建資金を集めて1883年に完成されました。こけら落としはスメタナのオペラ「リブシュ」でした。これは、ヴィシェフラドでプラハの未来を予言したといわれる伝説の王女の名前です。なお、国民劇場再建と国立博物館の設計者は同じ人物です。国民劇場

の礎石にはチェコ各地から取り寄せた石が使用されたそうです。

心の拠り所が文化であったところが重要です。プラハの中心街を歩いているときに、よくピラを渡されました。日本の繁華街の場合なら、サラ金か風俗関係が多いでしょうか。プラハではクラシック・コンサートのものだけでした。大小様々なコンサートが毎日のように、あちこちで開かれています。(筆者注：プラハにも風俗産業はあります。)

ここに紹介した自然史博物館は、おそらく予算は十分ではなく、ハイテクの展示物があるわけでもありませんが、国民に大切にされているという印象を受けました。

参考文献

- 円城寺 守(1998)：チェコ共和国の鉱床。地質ニュース。no.530, 42-48。
 Zdenek, Kukal., Jaroslav, Malina., Renata, Malinova and Helena, Tesarova (1989)：Man and stone. Geological Survey, Prague, in Academia, Publishing House of the Czechoslovak Academy of Science, Prague, 315p。
 Narodni Museum, Praha (2000)：A guidebook, Natural History Museum. National Museum, Praha, 82p。
 資料情報係(1981)：経済地理メモー社会主義国編-4, チェコスロバキア。地質ニュース, no.323, 58-59。

SURO Shigeru (2002)：National Museum, Praha.

<受付：2002年2月14日>